



ものづくりに触れる環境で幼少期を過ごす

実家は愛知県の山間部にあり、自然に囲まれて育ちました。母が陶芸をやっていて、家に窯がありました。小さい頃から陶芸の絵付けをしたり、ものづくりが身近な環境でした。よく絵を描いている姿を見て、父がスケッチブックをくれました。家にあるものを毎日描いてごらんと言われました。線で物を描いていくことが楽しいと感じていました。

高校では美術部に入りました。キャンパスに絵を描いていく中で、平面に描くことや想像して何かを描くことは苦手だと気付きました。手を使って何かを作りたいと考え、漆芸や金工など幅広く学べる国公立の美術系大学を目指しました。富山大学芸術文化学部のオープンキャンパスに参加し、自然に囲まれている環境が地元似ていると感じました。在学生の話聞き、興味を持ちました。

手厚い指導に感謝

富山大学芸術文化学部への進学が決まり、富山での生活を始めました。入学当時はコロナ禍の真っ只中でリモート授業ばかりでしたが、2年次に高岡キャンパスの授業が始まると、手を動かす授業が増えました。金工、漆、絵画、デザインをそれぞれやってみて、金工と漆で悩みました。手で触れて作りたいということ、道具を扱うのも好きだなと感じました。悩んだうえで漆を選択し、小川太郎講師の研究室に入り、制作を始めました。先生方が教室を巡回して1人1人の作業の進み具合を見てくださるので、基礎をしっかり教わることが出来ました。普段からコミュニケーションを取ってくださるからこそ、先生に質問しやすい雰囲気がありました。作業の確認など細かなことも聞きに行くことができる環境であることは、ありがたいなと思うとともに、富大芸文の良さだなと感じています。もっと学んでから就職先を決めたいという思いがあり、両親に相談のもと大学4年次に大学院進学を決めました。

工芸で培った力をプロダクトに活かす

プロダクトデザインの研究室で自動車メーカーの説明会があった時に、小川先生から「話を聞きに行ってみたら」とプッシュしてもらいました。その企業は、手仕事を大切にしている、異業種の工芸分野の人も受け入れていました。話を聞きに行き、自分の作品を見ていただいたところ、説明に来ていた社員さんが興味を持ってくださいました。本社でのインターンシップに参加し、車の内装デザインの部署のトップの方とお話ししました。コンセプトに偏っておらず、造形の作り方やモノの動きに注視している視点を評価していただき、内定をいただきました。



日本伝統漆芸展新人賞 乾漆累螺細平文香合「香韻交わる」

第43回 日本伝統漆芸展新人賞受賞

先生方の支えのもと、漆芸品の制作に力を入れてきました。細かい模様を丁寧に描き、2026年1月、第43回日本伝統漆芸新人賞を受賞することが出来ました。これから社会に出て、工芸で得た手を動かし、生み出していく力を活かしていきたいです。仕事に慣れ、生活に余裕が出てきたら漆作品を制作を続けていき、作品を公募展に出したいと思っています。